

ドイツにおける「持続可能な開発のための教育（ESD）」関連プログラムと ESD 評価枠組みの構築にむけた議論の現状と課題 —ESD に関する国際的議論に基づいて—

金戸 哲*, 永宮 祐司*, 佐藤 真久*

KANETO Tetsu*, NAGAMIYA Yuji*, SATO Masahisa*

*武蔵工業大学環境情報学部

〔要約〕本研究は、環境教育/持続可能な開発のための教育（ESD）に関する歴史的蓄積があり、多様な実践が行われているドイツを対象とし、ドイツにおける ESD 関連プログラムと ESD 評価枠組みの構築に向けた議論の現状と課題の把握を目的とする。本研究では、ドイツにおける ESD 関連プログラムと ESD 評価枠組みに関連する文献のレビューを行なった。とりわけ、ドイツにおける ESD 関連プログラムとドイツの ESD 評価枠組みを、国際的議論に基づく「ESD の 10 の視点」（佐藤ら，2008）から考察した。その結果、「ESD の 10 の視点」との共通点が見られた。とりわけ、ESD 関連プログラムでは、地域に根ざした ESD 実践の重要性が指摘された一方、ドイツの ESD 評価枠組みの課題として地域性への配慮の脆弱性が示された。今後、社会的文脈と社会的適合性を重視した ESD 評価枠組みの研究と、ESD 実践の進捗と達成を生み出す手段としての評価枠組みの効果的な活用が期待される。

〔キーワード〕ドイツ， ESD， ESD の 10 年（DESD）， 環境教育， 教育評価

1. はじめに

国際・地域レベルにおいて、持続可能な開発のための教育（ESD）の重要性が高まっている。2005 年に「持続可能な開発のための国連 10 年-国際実施計画（DESD-IIS）」が発表され、その中で示される 7 つの戦略の 1 つに「モニタリングと評価」が指摘された。欧州地域では、国連欧州経済委員会（UNECE）のイニシアティブのもと、DESD-IIS に基づく国別 ESD 評価指標開発が実施されており、ESD 実践とともにその評価活動の重要性も高まっている。

この欧州地域において、ドイツは早期から環境教育を実施し、ESD 推進のためのリーダーシップを取りながら、1990 年代後半から国内において ESD を実践してきた。ドイツにおける環境教育の実践は 1950 年代から始まり、1980 年代から環境教育が持続可能な開発（SD）の概念の進展とともに「網状性（Vernetztheit）¹⁾」を重視していくものへと進展を遂げている。環境教育が自然科学的

領域だけでなく、社会科学的領域を含む範疇へ拡大し、1990 年代後半からは、ESD の概念構築とその実践が環境教育の議論の中心となった。そこで新たな環境教育/ESD の取り組みとして、1998 年に公教育を中心とした BLK（連邦・諸州教育計画研究助成委員会）プログラム 21 が実施されるとともに、環境教育の進展型として ESD の地域実践が多く実践されるようになってきた。

2. 研究目的

本研究は、環境教育と ESD に関する歴史的蓄積があり、多様な実践が行われているドイツを対象とし、ドイツにおける ESD 関連プログラムと ESD 評価枠組みの構築にむけた議論に関する現状と課題の把握を目的とする。現状と課題の把握においては、国際的議論に基づく ESD の要素抽出と特徴把握を通じ、ドイツの ESD 評価枠組みのあり方に検討を加える。

3. 研究方法

本研究では、ドイツにおける ESD 関連プログラムと ESD 評価枠組みの構築にむけた議論に関連する文献の詳細なレビューを行なった。ドイツにおける ESD 関連プログラムでは、(1) BLK プログラム 21, (2) Transfer21, (3) ドイツの国家的 DESD プロジェクト(以下、ドイツ DESD プロジェクト)の 3 事例を対象とした。またドイツにおける ESD 評価枠組みの構築にむけた議論に関するレビューにおいては、ドイツの ESD に関する指標開発と評価活動において積極的に関与している Busch(2005)が指摘する「ドイツにおける ESD 評価の基礎的配慮項目」と、Rode ら(2008)が指摘する「ドイツの ESD 評価枠組み」を研究対象として当該文献のレビューを行なった。

なお、ESD 関連プログラムとドイツにおける ESD 評価枠組みの構築にむけた議論を考察するにあたり、佐藤ら(2008)²⁾によって提示されている「ESD の 10 の視点」を利用した(Box.1)。

Box.1 ESD の 10 の視点

- | | |
|------|------------------------|
| (1) | 相互関連性の認識 |
| (2) | 活動の文脈化 |
| (3) | 持続可能性の原則と概念の構築 |
| (4) | 環境倫理と多様な価値観の尊重 |
| (5) | 多様な教育手法と高度な思考技能の活用と学び |
| (6) | 多様な教育領域での実践とかかわり |
| (7) | 協同アプローチと能力開発 |
| (8) | 社会における学びの仕組みと生涯学習体系の構築 |
| (9) | 国際的な教育イニシアティブとの連関 |
| (10) | 現実的な社会転換 |

佐藤・阿部・アッチャ(2008)

佐藤ら(2008)の指摘する「ESD の 10 の視点」を本研究の考察に利用する理由として、(1)当該論文の筆者が国内外の指標開発プロジェクトに深くかかわっており、地域実践の事例研究と国際的な議論を基礎に視点の構築を行っていること、(2)国際的に ESD を俯瞰する際の視点の整理が、国際的にほとんどなされておらず、佐藤ら(2008)

の指摘する「ESD の 10 の視点」が、現時点で ESD を考察する際に参考になること、などが挙げられる。

4. ドイツの ESD 関連プログラム

4.1 BLK プログラム 21 と Transfer21

BLK プログラム 21 は、中等学校を対象として、15 州約 200 校が参加をした国家規模の ESD モデル事業である³⁾。Transfer21 は、BLK プログラム 21 の実施対象を初等教育にも拡大したものであり、BLK プログラム 21 の継続プログラムとして位置付けられている(de Haan, 2006)。特徴の 1 つとしては、政府、教育機関、研究機関、NGO、企業、地域社会などの協同と連携を重視し、公教育を中心としたプログラムであることである。染谷(2008)によれば、BLK とは、連邦と州の調整役のためにおかれた教育計画・研究振興のための連邦・州委員会であり、その調整と運営において連邦と州における連携を重要視している⁴⁾。また BLK では、政府の関係機関、教育機関、学校、大学等の研究機関、NGO、企業、地域社会、様々な分野の専門家が参加し、各関係者が「監査部」、「運営部」、「評価・研究開発部」、「調整部」、「実行部」の各部門において役割を果たしている(諸岡, 2005)⁵⁾だけでなく、州が学校の取組みを支援するための場・人材を提供する仕組みづくりに関与していることも特徴として挙げられる(染谷, 2008)⁶⁾。加えて BLK プログラム 21 は、政策レベルから ESD の支援を実施するとともに ESD に向けた具体的で革新的な活動を育むために、政策的に重要な意思決定者とその他の重要な機関の間で連携を作り、政府機関から NGO まで多様な機関を巻き込むことを重視している(de Haan, 2007)⁷⁾。

このように BLK プログラム 21 と Transfer21 では、協同と連携を重視した取組が活動の基礎となっており、連邦・州委員会の調整のもと行われている。BLK プログラム 21 と Transfer21 に関するもう 1 つの特徴としては、生徒の能力開発に焦点が当てられている点が挙げられる。染谷(2008)によ

れば、BLK プログラム 21 の目的として、(1) 学校教育の日常における ESD の概念を定着させ、子どもたちに生活と社会に結びつけ ESD を実施し、その促進に向けた新たな教授法や教材を開発すること、(2) 持続可能な社会に向けた児童・生徒の能力を育成すること、が示されている⁸⁾。特に BLK プログラム 21 では、「生徒が自ら判断し、持続可能性という意味において革新的に行動できるようになる」ことを重視しており、その能力開発にあたって、以下の 2 つの国際的な教育目的に対して配慮がなされている。

その 1 つは、「参加」、「相乗効果」、「自己評価」、「地域のアイデンティティ」の推進であり、持続可能な開発の基本原則と実際の教育改革・学校改革のコンセプトとの共通点を意識しており、さらには、持続可能性の視点からの学校開発を推進する「アジェンダ 21」の視点を重視していることである。

もう 1 つは、OECD の教育目的として位置付けられている能力開発のコンセプトに対する配慮である。とりわけ、基本原則として、「学際的な知」、「参加型学習」、「革新的構造」の能力開発モジュールを構築することを重視している(諸岡, 2005)⁹⁾。総じて、BLK プログラム 21 と Transfer21 では、学習者の能力開発と、それに基づく ESD 実践に焦点が当てられていることが窺える。

4.2 ドイツ DESD プロジェクト

次にドイツ DESD プロジェクトとは、ドイツ DESD 国内実施計画(2005)に基づき、DESD 国内委員会から 2 年間有効な認定を授与した ESD の革新的事業であり、公教育・学校外教育といった多様な教育領域を対象としている¹⁰⁾。ドイツ DESD プロジェクトは、BLK プログラムと Transfer21 の特徴と同様に、公教育を中心としながら連携の仕組み作りを重視した実践が見られる一方で、多様な教育領域のかかわりによる取組が見られる¹¹⁾。特に、NGO やその他の社会教育施設等を巻き込んだ、学校外教育での取組が多く見られる。さらに、ドイツ DESD プロジェクトが実践活動を認定する際の

基準に、参加型アプローチの重視、持続可能性の 3 領域(経済、社会、環境)との関連性の重視、地域的活動の推奨、といった点を配慮事項として提示していることが明らかになった。このように、ドイツ DESD プロジェクトは、公教育を中心に据えながら、学校外教育をパートナーとして捉えている BLK プログラム 21 や Transfer21 の実践アプローチとは大きくその実践方法が異なると言える。

5. ESD 評価枠組みの構築にむけた議論

ドイツにおける ESD 評価枠組みの構築に向けた議論に関して、主要文献のレビューを行なった。Busch(2005)は、ドイツにおける国レベル・国際レベルの教育のモニタリング活動と教育報告書に基づき¹²⁾、ESD 評価枠組みの構築を目的とした「ドイツにおける ESD 評価の基礎的配慮項目」を提示している¹³⁾。この基礎的配慮項目では、ESD の重点分野を 10 テーマに整理していることが特徴として挙げられる。

Rode ら(2008)は、「ドイツの ESD 評価枠組み」に関するレビューを行い、ドイツにおける ESD の評価目的、指標機能、評価手法等など、ESD の指標開発の背景と構築にむけた議論の整理を行っている。とりわけ、評価目的について、Rode(2008)は、ESD の継続的な進展を目的とし、ESD の進捗を評価する実行可能な手段の構築の重要性を指摘している。このことから、従来の教育達成を評価することだけでなく、プロセスを重視した進捗を評価することに焦点が当てられている点に、特徴があるといえる¹⁴⁾。指標機能については、ESD が比較的新しく、開発途上の領域であり、ESD の基本的概念の理解と実施及び普及の関連性を重視することから¹⁵⁾、(1) ESD の安定化への貢献としての指標群、(2) 実施と普及のためのサポート手段としての指標群、(3) 自己評価のツールとしての指標群、を提示している。さらに、評価手法については、ESD の特徴として多様な目標や基準を持ち合わせることから、各々の因果関係を明確化するため、投入-プロセス-活動モデルを採用している。また Rode(2005)は、ドイツの教

育制度が断片化している背景を指摘し、「ドイツの ESD 評価枠組み」として、(1)マクロレベル、(2)メゾレベル、(3)ミクロレベル、という各々のレベルに分けた ESD 評価枠組みの特徴を提示している。

Rode(2005)の指摘する「ドイツの ESD 評価枠組み」では、「(1)マクロレベル」を、「すべての ESD 活動の社会背景と枠組みを形作る社会、国家、国際的に政策決定するレベル」と表現している。このレベルでは、評価の投入とプロセスを重視しながら、学校教育における法的枠組みづくりや、学外のネットワーク構築といった ESD の活動を支援する側面に焦点が当てられていた。さらに、「(2)メゾレベル」では、初等中等教育、専門学校、高等教育機関、その他を含めた様々な教育機関を表している。ここでは評価のプロセスを重視しながら、(1)学内の支援制度の開発と確立、(2)学外との連携を通じた自己評価の促進、(3)ESD 普及を促進するネットワークに対する教育機関や教師の参加、(4)学内の活動に対する教師、生徒、保護者等の多様なステークホルダーの参加、に焦点が当てられていた。

「(3)ミクロレベル」は、個別的な教育方策が見られるレベルである。このレベルではプロセスと結果を重視しながら、特に効果的な学習形式、革新的なトピック、参加型アプローチ、批判的思考、ホリスティック・アプローチ、学際的研究、多角的視点からのアプローチといった授業実践のレベルにおける学習プロセスの評価について焦点が置かれていた。さらに、教育者の能力評価の側面にも配慮がなされていた。この「(3)ミクロレベル」では、「学生が学生自身の学習内容を活用し、学生自身の行動戦略を開発しあるいは修正し、自主的に新たな知識を習得し、現場あるいは日常生活で活用出来るようにする」ことを目的としている。そのため、ミクロレベルの結果の中で、(1)態度の変化とモチベーションの度合、(2)SD の原則及び考え方を理解している度合、(3)技術及び能力の必要性の度合、を評価することを提示している。総じて、授業実践におけるアプローチと、学習者の学びの結果を評価することが特に示されていることから、

プロセスと結果に評価の焦点が当てられていることが窺える。

6. 「ESD の 10 の視点」からの考察

ドイツにおける ESD 関連プログラムに対して「ESD の 10 の視点」から考察した結果、BLK プログラム 21 と Transder21 から、「(4)環境倫理と多様な価値観の尊重」以外の 9 つの視点との共通点が見られた(表1)。また BLK プログラム 21、Transder21、ドイツ DESD プロジェクトからは、「(1)相互関連性の認識」、「(2)活動の文脈化」、「(5)多様な教育手法と高度な思考技能の活用と学び」、「(6)多様な教育領域での実践とかかわり」が共通する視点として見受けられた(表1)。すなわち、学問的な領域のつながりと、協同や連携をするための他主体とのかかわりを基礎として、地域的・国際的な文脈の中で多様な教育手法等を活用しながら、地域実践を行う点において共通性が見られた。いっぽう、BLK プログラム 21 と Transfer21 の中では、「(3)持続可能性の原則と概念の構築」といった ESD の概念的な議論とその継続的な学びに関する要素が抽出されており、ESD の概念的な学びの重要性が指摘されている一方で、地域実践を重要視していることが特徴として挙げられる。さらに、ESD 関連プログラムに対して、「(4)環境倫理と多様な価値観の尊重」に関する要素が見られなかった。ESD 関連プログラムは、ESD の実践にかかわる方法やアプローチが重視されている一方で、ESD が価値観の醸成と態度の変容にまで焦点を当てる教育であることから、今後、多様な価値観の尊重への配慮と地域に根ざした ESD 実践を組み合わせる必要があると考えられる。

次に Busch(2005)の指摘する「ドイツにおける ESD 評価の基礎的配慮項目」および、Rode ら(2008)の指摘する「ドイツの ESD 評価枠組み」に対して、佐藤ら(2008)の指摘する「ESD の 10 の視点」に基づいて考察した結果、共通点がともに 6 つ見られた(表 2)。特に「(5)多様な教育手法と

表1 「ESDの10の視点」と
ESD関連プログラムとの接点

ESDの10の視点 (佐藤ら, 2008)	BLK プログラム21	Transfer21	独 DESD プロジェクト
(1) 相互関連性の認識	●	●	●
(2) 活動の文脈化	●	●	●
(3) 持続可能性の原則と 概念の構築	●	●	
(4) 環境倫理と多様な 価値観の尊重			
(5) 多様な教育手法と高度な 思考技能の活用と学び	●	●	●
(6) 多様な教育領域での 実践とかかわり	●	●	●
(7) 協同アプローチと能力開発	●	●	
(8) 社会における学びの仕組み と生涯学習体系の構築	●	●	
(9) 国際的な教育 イニシアティブとの連関	●	●	
(10) 現実的な社会転換	●	●	

(筆者作成)

高度な思考技能の活用と学び」, 「(6) 多様な教育領域のかかわり」, 「(7) 協同アプローチと能力開発」, において多くの共通点が見出された(表2)。その理由として、以下に示すような、マクロレベル、メゾレベル、ミクロレベルにおける考察の掘り下げがあることによるものだと考えられる。マクロレベルでは、学外における支援とネットワーク構築の側面に焦点が当てられており, 「(6) 多様な教育領域のかかわり」, 「(7) 協同アプローチと能力開発」に関する強調が見られた。メゾレベルにおいては, (1) 学内の活動に対する多様なステークホルダーの参加, (2) 学外との連携, (3) ESD 普及を促進するネットワークに対する教育機関や教師の参加, が重視されており, 「(6) 多様な教育領域のかかわり」, 「(7) 協同アプローチと能力開発」の強調が見られた。ミクロレベルでは, 批判的思考, ホリスティック・アプローチ, 学際的研究, 多角的視点からのアプローチ, 教員スタッフの能力開発の側面に焦点が置かれており, 特に「(5) 多様な教育手法と高度な思考技能の活用と学び」, 「(7) 協同アプローチと能力開発」に関する強調が見られた。このことから ESD の実践を評価する項目の中でも, 特に ESD 実践におけ

る手法やそれらを活用した学び, 連携と多様な教育領域とのかかわり, 能力開発を評価することに焦点が当てられていると考えられる。

また, Rodeら(2008)による「ドイツの ESD 評価枠組み」に対する「ESDの10の視点」から考察した結果, 「(1) 相互関連性の認識」, 「(2) 活動の文脈化」, 「(4) 環境倫理と多様な価値観の尊重」, への言及が見られなかった(表2)。とりわけ ESD 関連プログラムでは, 地域に根ざした ESD 実践を重要視する一方で, 「(2) 活動の文脈化」の中でも, 地域とのつながりに関する言及が見られなかった。これらの結果から, 今後「ドイツの ESD の評価枠組み」の構築に向けた議論の中で, 地域に根ざした ESD 実践を評価するために, 社会的文脈や社会的適合性への配慮が必要であると考えられる。

表2 「ESDの10の視点」とドイツの
ESD評価枠組み構築にむけた議論との接点

ESDの10の視点 (佐藤ら, 2008)	ESD評価の 価値の 基礎的配 置項目 (Busch, 2005)	ESD評価 枠組み(Rode, 2008)
(1) 相互関連性の認識	●	
(2) 活動の文脈化		
(3) 持続可能性の原則と 概念の構築	●	●
(4) 環境倫理と多様な 価値観の尊重		
(5) 多様な教育手法と高度な思 考技能の活用と学び	●	●
(6) 多様な教育領域での 実践とかかわり	●	●
(7) 協同アプローチと能力開発	●	●
(8) 社会における学びの仕組み と生涯学習体系の構築		
(9) 国際的な教育 イニシアティブとの連関		●
(10) 現実的な社会転換	●	●

(筆者作成)

7. 結論

ドイツにおける ESD 関連プログラムと ESD 評価枠組みの構築にむけた議論に関連する文献を,

国際的議論に基づく「ESDの10の視点」（佐藤ら，2008）に基づき考察を行った。結果，ESD関連プログラムとESD評価枠組みの構築にむけた議論の双方において，「ESDの10の視点」との共通点が見られた。

特に，ESD関連プログラムでは，地域に根ざしたESD実践の重要性が指摘される一方で，Rodeら（2008）による「ドイツのESD評価枠組み」では，文化的側面と地域性への配慮の脆弱性が示された。本研究では，国際的議論に基づく「ESDの10の視点」を通して，ドイツのプログラム事例と評価に関する議論の考察を試みたが，佐藤ら（2008）が指摘するように，各視点を関連づけさせ，学習と協同の継続的プロセスとして捉えていくことも，今後の研究において必要とされている。さらに，地域実践と国際的議論の双方から，佐藤ら（2008）の指摘する「ESDの10の視点」の限界性・有効性をさらに検討する必要がある。

今後，ドイツにおいて，社会的文脈と社会的適合性を重視したESD評価枠組みの研究を深めるとともに，ESD実践の進捗と達成を生み出す手段としての評価枠組みの効果的な活用が期待される。また，本研究を通して実施したドイツにおけるESD関連プログラムとESD評価枠組みの構築にむけた議論に関する文献レビューを基礎として，今後，ドイツにおける現場レベルでのESD実践を掘り下げるとともに，ESD評価枠組みの妥当性・有効性を検討する必要がある。

引用文献及び注

- 1) 環境，社会，経済の相互関連性とそれらの諸要因が網目の様に複雑に絡み合っている事
- 2) 佐藤真久・阿部治・マイケル・アッチャ，2008，「トビリシから30年-アメダバード会議の成果とこれからの環境教育」，『環境情報科学』
- 3) de Haan，2006，The BLK‘21’programme in Germany:a ‘Gestaltungskompetenz’-based model for Education for Sustainable Development，Environmental Education Research，Vol. 12，No.1
- 4) 染谷有美子，2008，「国家戦略でめざす学校での持続可能性教育-ドイツBLKプログラム‘21’以降の潮流-」，『環境情報科学』
- 5) 諸岡浩子，2005，「ドイツBLK Program“21”の取り組み-『持続可能性のための教育』の推進力として-」，『環境教育』，Vol.15 No.1
- 6) 染谷有美子，2008，前掲
- 7) G. de Haan，2007，Education for Sustainable Development in Action Good Practices N° 2-2007 UNESCO Education Sector
- 8) 染谷有美子，2008，前掲
- 9) 諸岡浩子，2005，前掲
- 10) <http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/ESD/products/C-FRG-1.pdf>
- 11) http://www.bne-portal.de/coremedia/generator/unesco/de/Downloads/Dekade_Publikationen_international/UNESCO_20today.pdf
- 12) A. Busch，2005，Indikatoren zum Monitoring von bildung fur eine nachhaltige Entwicklung in Deutschland，Unpublished diploma thesis，Lueneburg University
- 13) (1) ESDの意味における高等教育改革，(2) 生涯学習，(3) 持続可能性と関連させた学び及び学習内容，(4) 革新的な教授と教育手法，(5) 教育の場所における参加，(6) 教育のエコロジー化，(7) 解放，協力とネットワーク構築，(8) 学際性，(9) 想像力，(10) 意識変化
- 14) H. Rode and G. Michelsen，2008，Levels of indicator development for Education for Sustainable Development，Environmental Education Research，Volume 14，Issue 1
- 15) <http://www.bath.ac.uk/cree/resources/esrcesd/rode.pdf>